

さざなみ

# 国語教室

さざなみ国語教室  
 第472号 2021年7月25日  
 発行者代表 吉永幸司  
 連絡先 大津市柳川2-11-5  
 TEL 077-522-1008  
 発行所 滋賀児童文化協会  
 NPO 現代の教育問題研究所

### 日記の表紙

## ― 教生先生との六十年後の再会 ―

岸 優子

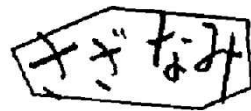
吉永幸司先生と最初にお会いしたのは、今からちょうど六十年前。私が、滋賀大学学芸学部附属小学校二年生の時でした。例年のように、六月になると、私のクラスに、五人くらいの教生先生（教育実習生）が来られました。吉永先生はそのお一人でした。小柄な先生でしたが、教育へのオーラがまぶしく、輝いておられました。附属小学校の子どもたちが教生先生を見る眼には、けっこう厳しいものがありました。なにしろ、毎年、六月と九月になると、各学年の各クラスに、大挙して押しつけていらっしやるわけですから、

自然とそうなります。休み時間子どもたちと一緒に遊んで下さった先生、写真を撮りっぱい撮って下さった先生、実習の終わりに一人一人にお手紙を書いて下さった先生、部活の面倒を熱心にみて下さった先生、二年にわたって来られた先生など、いろいろなタイプの教生先生がいらっしやいました。しかし、吉永先生は、特別でした。お名前の読み方が、一般的な「こうじ」ではなく、「こうし」という珍しい読み方であることも、その一因です。というのも、当時、私は『はなのすきなうし』（マンロー・リーフ作）という本

が大好きで、先生のお名前が、そこに登場する「フェルジナンド」という名の子牛（こうし）を連想させたからです。もちろん、それだけではありません。日々教材研究に取り組まれ、授業に臨むにあたって用意周到に準備を重ねておられるお姿は常に情熱的で、その教育者としての情熱は、子どもながら、全身で受け止めるべきものとして記憶に刻まれました。頬を赤らめながらお話になるときの表情や息づかいまで、はっきりと憶えています。

吉永先生と二度目にお会いしたのは、今から六年ほど前、京都女子大学を退職された先生の講演会の時でした。講演会の終了後に面談する機会を得たのですが、目立たない子であった私のことなど憶えておられるはずはありません。そこで、後日、お手紙をしたため、私の心の最も深いところで、教育者としてのあるべき姿を教えて下さった先生への思いをお伝えするとともに、先生の強烈なインパクトを証明する何かが実家にあるに違いないので、その証拠を捜してみますと約束したのです。

【4ページにつづく】



▼「国語の勉強は大それたことだと思ってしまうが、なかなかその手応えがなくて」ということから始まったメールでした。いつも、いい授業をしようという教材研究をしよう、子供の集中力が続かず中途半端で終わってしまうことのくり返しだったという反省の言葉が続く▼考え方を改めて、子供の発言やノートを真剣に聞き読みという気持ちに切り替えて授業をしたら「今日の授業が楽しかった」と感想を伝えるにやってくる子が出てきたという▼「楽しかった」と思える授業は、子供の立場から言えば学習内容が理解できていることであり、学習活動に対する手応えを感じていることが前提になる。国語科の授業では、読む・書く・聞く話すことを通して自分の考えを言葉で伝える、あるいは、言葉で理解をすることであろう。きっと、授業で、子供達が、言葉を得る手応えや学習力への自覚が生まれたのだろうと思いつつ教室の様子を想像した▼「子供の発言を丁寧に聞くように努力をした」「ノートに書いた文をしっかりと読み、何が書きたかったか理解しようとした」ということを日常的に考えるようになったという具体的な指導も添えてあった▼「授業が楽しかった」という先生へ子供の言葉の力を感じた。言葉の響きを感じながら国語の授業について考える機会であった。(吉永幸司)

タブレットを活用した

国語科の学習

北川 雅士

児童に一人一台タブレットが配布され、5月の連休明けから、本校でも使用が始まった。一学期は試行期間ということだが、6年生は積極的に使用し、経験を積み上げようということで各教科で使用しながら、できることとできないこと。有効に活用できる場面を探りながら使用をはじめた。

主に学習で使用しているのは児童が教室内で情報共有や交流ができるアプリケーション。このアプリケーションを使用して『たのしみは』(光村図書 6年創造)の学習に取り組んだ。この単元は言葉を選びながら短歌を作る学習で、一時間目は短歌とはどういうものかをみんな確認し、学級で短歌を作った。

学習では、まず短歌にしたい場面を決め、短歌を作った。次に作った短歌を5・7・5・7・7の5つに分けて5枚のカードに分け、タブレット上でつなげた。この状態で保存し、次の時間はこの短歌の表現の工夫をめぐらしてタブレット上で操作をしながら短歌を工夫していった。

タブレットを活用した短歌づくりでできたこと

・カードを操作することで、言葉の順序をすぐに変えることができる。

・新しい言葉が考えられたら、カードを作り、自由に入れ替えながら短歌を工夫できる。

・友達に完成した短歌を送り、評価を書き込んでもらい、返送してもらおう。

・データを送るだけで、簡易的な句会を開くことができる。

完成した作品は、短冊に清書し、

学級で句会を開いた。タブレットを学習に使用することで、児童は手で書くよりも主体的に学習に取り組んでいるように見えた。しかし、これはタブレットが触れるという喜びが大きいように思う。国語科では他にも話し合いをボイスレコーダーで録音して聞き返したり、提案文を書くための資料集めにタブレットを使用した。思考ツールとしては今後も活用できる場面は多く、指導する側も様々な方法を模索しながら使用していきたい。

一人一台のタブレット学習はまだ始まったばかりだが、GIGAスクールの時代にも、「手で書く」ことも大切にながら学習を進めていきたい。

(彦根市立城南小学校)

読書を広げる

西條 陽之

光村図書「本は友達」では6年間を通して様々な観点から読書生活を豊かにしていくこと、5年生では作家に着目して読を広げること狙いとしている。本校では毎日十分間の朝読書の時間を設けている。子どもたちは「ひみつシリーズ」や恋愛ケータイ小説、ゲームやアニメのノベライズ化されたものを好んで読む傾向があり、

本を手取る理由としては、作品の内容、表紙、本の厚みから選ぶことが多い。作家に着目して読書を展開していく経験はほとんどないということだった。文学作品や作家との出会いを通して、新たな読書生活を展開することで思考力や読み解く力を高め、人生を豊かにするような本との出会いに繋がりたいと考えた。

とは言え、一人一人の読書スピードにも偏りがあり、選書の好みもバラバラである。作家を決めて複数の本を読み、作家性や描かれるテーマを見出すには膨大な時間が必要である。そこで、単元が始まる三週間前から着目する作家を同じくする「読書サークル」を設定した。同じ作品や作家について

語り合う仲間がいることで協働的に学ぶ必然性を持たせた。また、「活用として、読書記録をブックリストとして残したり、サークルごとのページを使って情報を共有できるようにした。

作品や作家について情報を共有することで自分の考えを広げる姿が見られた。特にマツピングを使って「テーマ」や「印象に残った出来事」、「主人公」などの観念に分けて書き込むことで整理しやすくなったようだ。しかしながら、一人一台端末を活用する中で、書き込むことと話し合うことのバランスが取りにくいと感じた。また、作家の魅力や作家性について何を書くべきか見出せないようであった。インターネットを活用して、作品の傾向や来歴を見つけていくことはできたが、それは本のそで(カバーの折り返し部分)にも書いてある。知恵袋の意見を参考にすると子もおり、それでは他人の意見を鵜呑みにしているのと同じである。便利の中にも、情報を的確に読み取る力が必要だと猛省した。今回得た、作家に着目するという読書の広がりもこれからの意識できるよう働きかけ、ブックリストを綴っていくことが大切だと感じる。

(大津市立小野小学校)

「スイミー」が  
主役だと思ふ理由  
川端 大介

「小学校でなぜ、物語文を教えるのですか。」このように問われたら何と答えるだろう。今の私は「人間が幸せに生きていくために必要な心を耕す視点を増やすため。」と答える。

感染症対策が進む中、人間を脅かす脅威が「感染症」ではなく「人」と伝えるメディアが多い。私も同感である。国中の人たちが幸せに生きるために、多くの議論がなされている。考え方が多様な中、「自分の考えを聞いてもらえ」という事が、重要ではないかと考えるようになった。

学級にも通じることがある。「自分の考えを友だち聴いてもらうこと」とは嬉しい事だ。多様な解釈が生まれた2年生の物語教材「スイミー」の学習の様子を伝える。

指導計画は、全7時間。第2時間の「登場人物、主役の検討」をした時の事。まず、登場人物とは何かをきちんと教えないといけない。登場人物とは、「お話の中で、話したり、動いたり、考えたりする人や動物や物。お話を劇にした時に、役が必要になる。」このように押さえた。「小さな魚のきょうだいたち」「まぐろ」「くらげ」「こんぶ」「わかめ」「うなぎ」等、様々な登場人物が出た。「お話ししているからスイミーは登場人物です。」等、登場人物の概念をきちんと踏まえて、意見を出していた。そして、主役の検討に入る。主役は学級三十人全員が「スイミー」だと答えた。そして、「どう問うた。」なぜ、スイミーが主役だと言えるのですか。」この問いに対して

児童は様々な解釈を出し合った。「お話の題名がスイミーだからです。」「お話の初めから終わりまで出てくるからです。」「セリフが一番多いからです。」のように、スイミーが主役だと思ふ理由は千差万別であった。

スイミーの主役が「スイミー」であることは、何となく分かるだろう。そこで大切なのは児童一人ひとりの理由の違いに目を向けることだ。解釈の理由を交流することだ。「そうか、そんな考えもあるんだ。」や「わたしとこの部分は同じ考えだなあ。」「考えが全然ちがうなあ」と考えの違いを知ることが出来る。そうやって、考えを交流できる毎日から、「考えの違い」を大切にすることが出来る児童が育つ。「自分の考えを聴いてもらえて、学校で楽しいなあ。」につながら、笑顔の児童が増える。

「手段と目的を明確にしなさい。」と先輩教員に何度も教えていただいた。教えたいのは、「スイミー」ではなく、幸せに生きていくために必要な汎用的な力である。

スイミーの学習が終わった後、ある児童が私の所に寄ってきて、「先生、ドラえもんかのお話の主役ってドラえもんかおのびたのどちらだろう。」と言った。国語の学習で扱うことは難しいが、クラスで話し合うと、白熱するであろう内容であった。

これからの世の中、「正解」はないと言われている。「最適解」や「納得解」を見つけていく事が大切だ。子どもたちには「みんなの考えが違っても楽しい。」という実感を持たせ続けることが大切だと感じた。

(守山市立立入が丘小学校)

1人称の物語  
川端 由起

国語の最後の単元「カレライリス」を先日学習し終えた。この作品は、教科書改訂前では、6年生の最初に学習する物語作品であったが、教科書改訂後は、5年に降りてきた。作者は重松清さん。人の心の機微を描いたら、この方右に出る人は他にはいないのではないだろうか。それほど、上手く心情を描き出す人である。私は恥ずかしながら、それまで「カレライリス」を読んだことがなく、5年生になって初めてこの作品を読んだ。言うまでもなく、重松さんの作品は何冊か読んでいたが、改めて教科書に出てくる作品として読むと、不思議な感覚が襲ってきた。

4月に学習した物語「名前つけてよ」の書き出しは、学校からの帰り道のとき、牧場のわきを通りかかったとき、春花は、そこに慣れない子馬がいることに気がついた。とい書き出しで始まるが、「カレライリス」は、ぼくは悪くない。だから、絶対に「ごめんない。」は言わない。言うもんか。お父さんなんか。という書き出しである。この小説はぼくが語っている、いわゆる1人称だと気が付いた。もしかして、1人称は、この小説が初めてではないかと思いい、1年生から4年生までの光村の教科書を調べてみると、確かにそうであった。はたして児童は気づくのであろうか。通読の段階で、「児童にこの物語は、今までの物語と大きく異なるところがありません。どこかわかりますか。」と問

た。出てきた答えは、「ファンタジーではなく、現実的。父と子の愛情物語。」など、物語の良さを理解できてはいるが、中々出てこない。私は、この物語は、ひろしが自分目線で語っていく「1人称」の物語なんだ。ということも伝えると、児童は最初は「？」という表情であった。だから、4年生のデジタル教科書を再度一緒に見つけてみた。「白いぼうし」「一つの花」「こんぎつね」「プラタナスの木」4作品を見ることで、「カレライリス」の作品の特徴が、はっきりと理解できた。児童の顔もすっきりしたようだった。

そして、2次では、主人公をひろしではなく、お父さんに変えて物語を作ってみた。最初は戸惑いを見せた児童であったが、取り掛かると、「あ、このセリフはお父さんから見るとこうだよな」とか、楽しそうに取り組んでいるのが伝わってきた。この時間の振り返りで、男子児童が、「視点がかわるだけで、全然違う物語になったので、おもしろかったです。」と書いてくれた。4年生までは、物語といえは心情理解に力点を置いていた。今回は、「作家で広げようわたしたちの読書」の単元の中で、重松清さんの「カレライリス」という作品を読む、という位置づけである。なので、作品の楽しさ、重松清さんの発想の豊かさを児童に知ってほしかったら、主人公を変えて物語を作るという学習ができた。これからも、児童が主体的に活動できる学習を考え、提供していきたい。

(草津市立志津小学校)

【巻頭言1ページのつづき】

しかし、その約束を果たすのは、簡単なことではありませんでした。その後、私は、華頂短期大学で、幼稚園教諭を目指す若い学生たちを教えることになり、また、義母の介護も加わったからです。その間、先生からは、数々の「著書や「さざなみ国語教室」を何度もお送りいただき、気になりながらお約束を果たすことができませんでした。

ようやく、事態が動き出したのは、昨年のこと。退職して時間を自由に遣うことができるようになって、何度か、実家の搜索を行いました。というのも、実家には、母が子どものために、小学校六年間の思い出を、一年ずつ詰め込んだ「宝箱」が大切に保存されていたはずだからです。しかし、数日前、宝箱は、思いがけないところで見つかりました。実家ではなく、自宅の二階の本棚にあったのです。結婚後、実家の母が、孫を世話するために来てくれていた時に、大事な物だから、と運び込んでおいてくれたようです。早速、二年生の宝箱を開けてみると、中には、絵画作品、テストの答案、創作お話の原稿、クラスの名簿、担任の先生からの年賀状、お友達からの手紙などに混じって、『白い船』(一九六二年刊)と

いう学校文集と、新学期から学年末までの毎月の日記を綴じた冊子十数冊(夏休み、冬休みを含む)がでてきました。その日記のうち七月の分を綴じた表紙に、なんと、「なまえ(よしながこうし先生)」と読める拙い字とともに、先生のお姿が描かれているではありませんか。

七月といえば、教生先生との別れの月です。担任から、「教生先生との思い出」というような課題が出たのだと思います。半袖のポロシャツを着て、フサフサとした髪の毛をさされていますが、向かって左側の耳しか描かれていません。右側の耳は消しゴムで消した痕跡があります。これには理由があります。当時、教生先生は、いつも、教室の黒板横に設えられた専用の座席に座っておられたのですが、吉永先生は、名字が「よ」で始まりますから、その座席の一番右端に座っておられたので、私には、先生の左側の耳しか見えなかったからなのです。しかも、指の数は、左右とも4本ずつ。机の上には、お行儀良く、親指を中に入れて、手をついておられたからでしょう。眉毛がきりつとしていたのは、おそらく、その当時の先生の特徴だと思います。私は、当時、六歳六か月でしたので、描くべき

対象について、知っていることではなく、見えていることを観察して描いていることに、ちよつとした驚きを感じています。いずれにせよ、日記の表紙に、他の教生先生ではなく、吉永先生だけが描かれているのは、先生こそが、教生先生を代表する「教師の鑑」のように受け止められたからにちがひありません。

長い人生からすれば、ほんの瞬間に過ぎない「出会い」ではあっても、人の生き方に影響を与える「出会い」というものがあります。吉永先生との「出会い」は、その後、教育学を専門として、教員養成にもかかわって来た私の四十年間の歩みにとつて、まさにそのよくなかけがえのない一瞬であり、原点でした。私の人生の早い時期に、先生に出会わせて頂いたことに感謝するとともに、今も精力的に進化を続けておられる先生のご健康を祈念するばかりです。

(華頂短期大学  
幼児教育学科元教授)



編集後記

▲六月例会  
(第四七一回)  
の提案は西條

陽之さん(大津市立小野小)「国語科におけるSIGASKUール構想の実践」。五年の一学期の実践を報告。

▼①「漢字の広場」では個々の児童がタブレットに作成した文の一覧を画面に映し一斉学習で確かめた。個別学習を一斉学習の場面に活用した。②「古典の世界」ではグループでの音読を動画編集し、再生してめあてに沿って修正した。この活動は音楽や、総合学習での発表場面にも広げたとの報告。③タブレットを自分のノートとして活用し、個別にページに書き込んだ友達の見えを映し、話し合う授業の実践。リアルタイムで互いに閲覧できる良さを、対話的な学びの過程に生かそうとしたもの。

▼協議では、各校のICT環境と、その活用方法の実際の利点や課題を交流した。個別と協働の学びを結んだ授業のデザインができやすいのではな

いか。  
・児童一人一人の学習の足跡を残すことが容易で、可能になる。  
・一時の授業の工夫と同時に学年を見通すことも大切にしたい。  
・学び手である児童の視点から、学び易さ(難しさ)を把握し、問題点や利点を実証的に検証整理して、実践に生かすことが大切だ等  
▼今年度の研究課題が確かになつてきた。各人の実践を通じて研究を深めていきたい。  
▼巻頭には岸優子先生から貴重なご提案を頂きました。深謝。  
(森 邦博)